破壊的精神の鈍るところ

加藤朝鳥

所謂月並的批評壇の上ではあまり反響を見ないで、一寸[illegible]さびしい[illegible]た風[illegible]はあるが、田中王堂學人の書くものは最近にまつて急く氏一流の筆の冴えがはつきりし、飽くまでも獨自の見解を把持して動かないところ、益々氏ならの面目が發揮されて來た様に思ふ。王堂學人をもつてよく推賞したのは流石に故岩野泡鳴であつた。いや推賞と云ふのは語弊がある。王堂學人は食ひつきもし利用もし、とるかく手[illegible]底のあるだけの反響を批評壇に作用さした点で、あの反撥的な泡鳴と、理論一点張りの王堂學人とは相撲の如くに見えた時もあつたが、それも既に一時代の昔と過ぎてしまつて、其の後の王堂學人はまくとる空谷の跫音を無反響に行く一老論客としての孤寂を感ずるものがある。しかしそれがまた一面ひな哲人ならぬ王堂

10 20 (圖南堂特製)

EAGLE